

---

Can you tell me ?

空音悠都

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Can you tell me?

### 【Zコード】

Z7585P

### 【作者名】

空音悠都

### 【あらすじ】

何もかも全く興味の無く感情というものが無いような少女、雪野紗那。

彼女は人と必要以上関わりなく生きてきた。自分のことを友達と思つてくれている人もいるが、紗那にとつて興味がないただの存在。孤児院で育つた彼女は、人に笑顔も泣き顔も見せたことがなく、いつも無表情であった。それは高校生になつても変わらない。でもとある日、ある本が紗那の視界に入った。それを読んでふと思つた。

『私は何なのだろう?』

生きる意味も死ぬ意味も全くない彼女。私という存在さえも興味がなかった彼女がふと思つたこの思い。そして、彼女は初めての体験を何度も体験するようになる。

『私は何?』を題材にして書きます。

## プロローグ

何もないつまらない日々。

そこに何かを見つけるには、私にとつてとても大変な事。

あつちで下品に笑う女子高生も、酔つ払つて吐きそうになつてている  
オヤジも、ピアスばかりしているチャラ男も・・・

何もかも興味がない。私は見すにただ彼女たちの横を通り過ぎ  
る。

「でさあ～そのオヤジがあ  
「え～マジキモいんですけどお」

女子高生の横を通り過ぎればそんな会話が耳に入つてすぐに出で  
く。

興味ない。

私は毎日を機械人形の如く同じことをやつている。

私の人生も何もかも興味がない。

他人にも、衣食住にも、生きる事も、死ぬ事も・・・

何もかも興味が全くない。

誰かが言つてた。「君には心がないんじゃない?」

そんな事しらない。

だつて・・・

自分の事にも興味がないから。

## プロローグ（後書き）

アドバイス、脱字、誤字などがありましたらいつでも歓迎します！  
更新が遅くなるかもしれないのにご了承ください。

私と二つもの。(前書き)

遅くなりました( - - - )

私といつもの。

県内で一番頭が良いとされる名門高校に通う雪野紗那は何事にも無関心といつことで学校内で有名だった。

彼女には才色兼備、文武両道といつ言葉がよく似合つ子で、その事も彼女を有名にさせた。

彼女に好意を寄せる男子も数多く、秘密のファンクラブもあるといつ噂はどうでもいい話だ。

「紗那。 今日も会ひれたらしいね」

昼休みの立ち入り禁止の屋上で一人、お昼ご飯を食べている紗那にむかって、一人の少女がため息交じりに言つた。

彼女の名前は朝比奈早苗。 紗那の幼馴染であり、紗那が唯一まともな会話をする人間である。

「・・・興味ない」

紗那は弁当ではなく、栄養調整食品のクッキーを頬張りながらつぶやく。

「紗那つて女子なんだからそういうのに興味持つた方がいいよ」

早苗はにやにやと笑いながら彼女の顔を覗き込む。

彼女は少しだけ表情を歪めたが、すぐにそっぽを向いた。

「他人に興味を持つても何もメリットがない。それに・・・」

ほんの一瞬だけ、紗那が泣き出しそうな表情になつたが・・・すぐ  
にいつもの仏教面に戻つた。

「しゃ・・・

キーンコーンカーンコーン・・・

チャイムが鳴り、紗那は早苗の方を向いて無表情で「遅れるわ」と  
呟くように言い、さっさと歩いて行つてしまつた。

早苗は悲しそうな表情をしながら紗那の後に歩いて行く。

部活動をしていない紗那はいつも早めに帰る。

早苗は部活をしていて、一緒に帰るということはしない。まあ、紗  
那は好んで一緒に帰るということはしないのだが・・・

早苗は紗那とは全くと言つていいほど逆の性格をしている。  
アウトドアで、明るくて、誰からも愛されて・・・

「私には手の届かないものを持つてる・・・

それはとても羨ましくて、憎らしかつた。

でも、そんなのは私に関係がない。だって・・・私は誰にも興味を  
持つていけないのだから・・・

バスの中で、紗那はふと思つ。

いつからだろ？・・・

私が感情を殺してしまつたのは・・・

今私は、笑つとも、泣くことも忘れてしまつた。

紗那はバスを途中で降りて、本屋に寄つた。

特に読みたいはないのだが、夜までの時間をつぶすために何となく読んでいるというだけである。

適当に店内を見回すと、漫画本売り場には子供たちがたくさんいて、雑誌売り場には若い人やおっさんがたくさんいて、小説やエッセイのところには人があまりいなかつた。

人がたくさんいるところが苦手な紗那は小説とかの本棚に歩く。

適当に題名を見ていると、一つの本が目にに入った。

今まで本に興味がなかつたが、この本には惹かれた。

”人生の意味、自分という事”

普通の女子高生ならこんな本は読まないだろ？  
しかし、彼女は惹かれた。

それを手に取り読み始める。

そこまで厚くないが、彼女は時間をかけてゆっくりと読んだ。

そこには人生の事とか、自分の意味、人が生まれた意味・・・たくさん書いていた。

こういう本は綺麗事をまとめたものが多いだろうが、この本は違つた。

苦難、悲しみ、喜び、色々な感情が書いてあった。

読み終わると、彼女の心の中には一つの疑問が残つた。

「私って何だらう？」

何にも無感情で興味が無くて、喜びも感じない。つまらない日々を送つてている。  
でも、私にはこういう権利が無いのだからこれが当たり前・・・そう思つてきた。

わからない・・・

ふと時計を見ると、よい時間になつてきた。

その疑問を心に秘めたまま、紗那は本屋を後にした。

## はじめまして。

夜の街を紗那は歩いて行く。

風俗店に行くというわけではない。彼女がたどり着いた先は、とある高級ホテル。制服のまま、中に堂々と入る。

高そうな服を身にまとう人々。紗那は着ているものが制服なのだが、そこにいる大人達に劣らない気品が漂っていた。

紗那は何も気にせず、何時も通り歩いて行く。すると、紗那の目的地の目の前で柄の悪い男共が若い男を取り囲んでいた。

「あ、あ！？何つた！てめえ！！」

「ですから、お客様の『来店は』遠慮願いたいのです」

若い男は臆する事なく淡々と言つ。男共は怒りが頂点に達したのか、若い男を殴りうつした。

「おっさん、やめなよ」

今迄黙っていた紗那が口を開いた。

柄の悪い男共は殴るのを止め、紗那に注目した。すると、男共の表情が緩んだ。

「お嬢ちゃん。これは大人の会話つてヤツだぜ。首を突っ込んじゃあいけねえ」

紗那は仏教面で何も言わない。

「それよりお嬢ちゃん、俺達といい事しねえかあ？」

柄の悪い男共は、今度は紗那を取り囲んだ。そして彼女の肩に触れた、その時・・・

バシンッ！

乾いた、何かを思いつきり叩くような音が響いた。紗那の肩に触れていた手は赤くなっていた。驚く男に彼女は吐き捨てた。

「触んじゃねえよ。汚らわしい」

低く冷たい声。

先程まで絡まれてた若い男は一ヤリと笑った。

柄の悪い方は我に返り、怒鳴った。

「調子のいいんじやねえよテメエエエー！」

殴ろうと腕を振り上げた瞬間、紗那はその腕を掴み、一本背負いをした。

大の男が華奢な少女に投げ飛ばされ、ドシンッと床に叩きつけられた。

呆気にとられる男達。床に転がった男の腹に紗那は足を乗せて、グリグリと腹に足をめり込ませる。

「あ、？調子のいいんのはおつさん達つしょ、私の仕事増やさないでくんない？」

転がつてゐる男の脇腹を思いつきり蹴る。蛙のようなうめき声を出す男。残りの男は悲鳴を上げて、どこかへ居なくなってしまった。

床にいる男を紗那は優しく笑みを浮かべながら、見下す。

「見捨てられたな、おつさん」

そして、耳元で囁く。

「これで機にもう来るんじゃねえよ」

冷たい声。男は悲鳴を上げて逃げて行つた。

「いい仕事したね、紗那ちゃん」

若い男が笑顔で紗那に近付く。

紗那はため息をついてから制服に着いたしわをのばす。

「用心棒としての仕事をしただけです。マスターの方が強いのになんで追い払わないんですか？」

マスターの呼ばれて男はニッコリと笑う。

「いや～俺の両手は人に美味しい酒を渡すものだからぞ」

紗那はもう一度盛大にため息をついて一言。

「アホかつ」

と言つて、鞄を捨い店内へと歩いて行く。マスターは紗那の後ろで「アホかはひどくない?」とか「わざわざめつちやいい事言つたじやん」とかぼざいている。

紗那は振り返つて、マスターの目の前に人差し指を立てた右手をずいと出した。

「マスター。色々ほざくのは勝手ですが・・・女子高生の着替えを見ないでくださいな」

マスターは女子更衣室にまで着いてきたのだ。彼は頭をぽりぽりと搔いて、少し困ったように笑つた。

「覗く!」としたのばれ・・・ブツ!...!...

持つていた鞄をなげつける。マスターはそれでも居なくならない。なので、近くにあつた椅子を片手で持ち上げる。

流石にマスターは青ざめて直ぐ様女子更衣室から出でていつた。

やつとで着替えると、自分のロッカーを開く。そこには黒を基調とした、スーツの様な男子用の制服がかけてあつた。

更に、男装用の金髪のかつらとメイク道具も置いてある。

彼女は慣れた様子で制服を着て、メイクをして、かつらを被る。

どこから見ても二十歳ほどの男性にしか見えない。

「さあて。始めますか」

紗那の高校ではバイトが許可されていない。そのため、バイトをやる場合にはばれなようにするしかない。その方法として彼女は男装を選んだのである。マスターである櫻井雅人もまだ未成年である。といつても今年の春に20歳になるのだが・・・。紗那は「」の看板であり、彼女のファンも多いといつ。それが男女問わずという事であるから驚きだ。

女性からは「かっこいい」と、男性からは「かわいい」ということらしいが。

「マスター。準備終わったよ」

店内に行くともうマスターはお酒をブレンデしていく最中だった。もうお客様がいるらしい。カウンター席に座っているのは、黒いコートで身を包んだ青年。少々うつむいていて顔が見えない。

「あ、修」

「了解つす」

「」のお客さんの注文受けた。俺ちょっと忙しくるから

ちなみに修一とは紗那の偽名である。

マスターがいなくなるのはいつものことだ。  
多分またお酒の入荷を今の時間にしてしまったのだろう。

「」注文は?

青年に問い合わせる。その時、こいつが顔をあげた。

「つー

「じゃあ、ピンク・ジンを

「その顔は見たことがある・・・  
ああ、思い出した。こいつは・・・

「どうしました?

「いえ

同じクラスの学年2位、東条悠。

いつも冷静沈着を心掛けているこの私が少しだけ動搖してしまった。

ばれてしまわないだらうかと不安が心の中を支配した。

そんな不安とは余所に、彼はのんびりと紗那の作ったお酒を飲んでいる。

「何か悩み事でも？」

元々女にしては声が低い紗那だが、さうに声を低めて悠に質問した。

「え？」

不思議そうに首をかしげながら紗那を見てくる。その表情は学校では見たことがないもので、ほんの少しだけこの男がかわいらしく思えた。思わずすくすくと笑ってしまった。すると東条はさうに困惑した表情になる。

「いえ・・・失礼しました。バーといつものにお酒を飲みに来るだけなく、何か悩みを相談して来る人も多いんですよ

東条は納得したような表情になり、紗那を見つめてきた。紗那はお酒の整理の手をやめて首をかしげる。

「なんですか？」

「あつ・・・いえ」

何なんだと紗那は眉を寄せて少し不機嫌そうにする。そして、なぜか頬の赤い東条を見つめる。もしかしてと思いそつと彼の額に手を当てる。びくっと反応する東条に問いかける。

「あの、風邪ですか？それと、酔っちゃいましたか？お水持つてきますか？」

ここで寝られては困ると思いながら必死にこいつが寝ないように言葉をかけた。東条の頬は治まるどころか顔全体が赤くなつていつた。どうしたものかと首をかしげ、彼の体温を測るために額を近づける。そしたら、いきなり彼が立ち上がつた。

「あのつ、俺、帰ります」

帰れ帰れと心の中で思いながら、ほんの少しだけさびしそうな表情にする。

「ゆつくつしてくだわつていいの？」

営業スマイルを浮かべながらまだ飲みかけのピンク・ジンを片づける。そして再びお酒の整理を始める。しかし、東条は一向に席を立とうとしない。一体なんだと振り返り、ほほ笑む。

「どうしました？」

「あ、あの・・・また・・・来ていいですか？」

いつも自信満々で廊下で歩いている東条悠本人とは思えない程自信

なさげだ。笑いを必死にこらえながら再び営業スマイルで答える。

「ええ。 いつでもいらしてくださいね」

東条の顔は一気に明るくなり、カウンターの上に代金を置いて楽しそうに帰つて行つた。その後ろ姿を見つめ溜息をつく。

「あの少年・・・修一君に惚れてんじやない?」

いつの間にか後ろに立つていたマスターが紗那の肩に顎をのせる。紗那はすぐ隣にあるマスターの顔を睨みつけて先ほどより深い深い溜息をつく。

「あのですね。 東条悠は男で私も今は男ですよ。 そんな事ありえないですって」

「ん? 知つてんの? あの少年の事」

いつまでも顎をのせているマスターの頭を軽く叩いて、ほほ笑む。

「同じクラスですからね。 知つてて当たり前ですよ」

答えてやつとで離れてくれたマスターの顔を見るとその顔はとても不機嫌そうだった。

そしていきなり紗那の腕を掴み紗那を押し倒した。その衝撃で後頭部を床にぶつけた彼女は彼を涙目で睨む。

「いきなり何ですか」

「俺にはそんな表情見せないのにな。 なんで東条つてやつのこと

話してるときに笑つてんだ？」

マスターの表情はとても冷たくて、寂しそうで・・・  
ああ、いつもの嫉妬かとか心の中で思つて・・・

「安心してください。あの人にそんな感情はありません。私が人を  
愛せるともいます？大丈夫です・・・約束は守ります」

その言葉を聞いて安心したのか、彼は紗那の唇に自分の唇を軽く重  
ね合わせた。そして、紗那の胸に顔を埋めてきた。彼の頭をそつと  
なでて、天井を見つめる。あ、そろそろ部屋の模様替えをしなけれ  
ばならないと思いながらこのいびつな関係をいつものように受け入  
れた。

私は恋をしてはいけない。

“約束”があるから・・・

バイトの後、まっすぐに家に帰る。家に着くころにはもう夜中の2時を回っていた。紗那の家はバイトの場所からは程遠くない距離にある大きなお屋敷。

・・・奥様方の噂では、この日本内で10番以内には入るくらいの大きさらしい。

玄関まで遠い門をくぐり、洋風のお屋敷の玄関を手指す。夜中のため、電気は一個も付いておらず静まり返っている。父さんが自慢だと言っているレンガの壁もほとんど見えない。

「今、お帰りですか？」

庭の薔薇庭園の影から強いが静かな声が聞こえてくる。紗那は立ち止り、声の方向を見ず星の見えない空を見上げた。

「何かしら? 美玖<sup>みく</sup>」

静かに現れたのはメイドの姿をした女性。肩で切りそろえられた黒髪は闇に溶け込んでいる。冷たい瞳を細めながら小さくため息をついた。

「紗那様。私は何も見ていません。ですから、旦那様と奥様に見つかる前にお早く自室にお戻りください」

紗那は返事の代わりに微笑み、小走りで玄関へと向かって行く。美玖は彼女の友人として、その背中を見守った。

朝になると、美玖が紗那の自室へ朝食と紅茶を持って入ってきた。その頃にはもう、紗那は着替えと登校の準備は完了していた。シミ一つない白いテーブルクロスが敷いてあるテーブルの上に音も立てずに静かに並べてゆく。全てを、まるでどこかの高級料理店の様な綺麗な並びで並べ終わつた後に、窓で空とにらめっこしている彼女に告げる。

「紗那様。お食事の準備ができました」

「・・・わかった。ありがとうございました」

彼女が振り返ると、美玖が小さくため息をついた。その様子を見て紗那は怒るのではなく逆に笑つた。その笑顔は美玖にしか見せたことのないものだ。

「本で読んだわ。ため息を一つするたびに幸せが一つ逃げて行くそ  
うよ」

美玖は黙つたまま椅子を引き、紗那が座つた後はテーブルの横で静かに立つていた。紗那はスクランブルエッグをスプーンですくい、パンの上にのせて食べながら彼女に負けないような静かな声で訊く。

「美玖、友人として聞くわ。お父様に昨日のことを申し上げたのか  
しら？」

美玖はくすくすと笑つて答える。

「ワタシはこれでも友人思いなんだよ。知つてた？」

つまり言つていないと云ふことだ。「そう」とだけ冷たく答えて、食事を口に運ぶ。内心、ほつとしている。お父様にバイトなどしているとバレた日には・・・想像もしたくない。お母様には・・・心配をかけたくないから言いたくないだけだけど・・・

「安心してるのでしょ？」

美玖がそんな事を聞いてくるものだから、無言で食べ続ける。美玖が自分の考えをこれ以上読まないよう、細心の注意を払う。しかし、そんな考えも美玖に見透かされている。彼女は笑っていたが、すぐに悲しそうな表情に変化した。

「・・・あのバーに行つてるのね？」

紗那の動きが止まる。そして、窓の外を見つめて美玖のほうへ顔を向けないでの無感情の声で返答してきた。

「だから何？」

「もう・・・忘れようよ・・・それで紗那は」

バンッと紗那が壊れてしまつ勢いで両手でテーブルを叩いた。そして、悲哀を含んだ瞳で美玖を睨みつけて、悲痛の叫びの様な声で叫んだ。

「貴女には関係ないでしょうツツ・・・」

先ほどまでの和やかな会話の終焉の鐘のような、美しい純白のカツプが割れる音が部屋に響く。そして、緋色の絨毯を色濃く染めた。

その染められたところにはまだ温かかった名残がわかる。

「「」めん・・・」

静かに謝る美玖。紗那は静かに立ち上がり、革のスクールカバンを掴み部屋の入口へ向かいドアノブに手をかけた。ドアを開くと同時に、震えていて、優しくて、悲しい声で紗那が告げた。

「ありがとう・・・ごめん・・・私は、紗那だから」

それだけ言って、部屋を後にする。そして彼女は、雪野紗那となる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7585p/>

---

Can you tell me ?

2011年11月13日07時36分発行